

遊んで、集めて「泥面子」の世界

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(公財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



写真1 出土した泥面子

はじめに「ひのみこ泥面子」と呼ばれる土製の円盤は、江戸時代の玩具です(写真1)。2021年に下京区河原町七条で実施した発掘調査で、200点以上もの泥面子が出土しました。

近年、子どもたちの間ではテレビゲームやカードゲームなどの遊びが流行していますが、今から約300年前の江戸時代には、この泥面子を用いた遊びが大流行し、あまりの加熱ぶりに何度も禁止令が出されるほどでした。これまで京都の発掘調査でたくさん出土している泥面子。今回はそんな泥面子

の魅力についてご紹介します。

泥面子とは 粘土を直径約1cmから6cm、厚さ約1cmほどに成形して素焼きした小さな円盤状の玩具です。昭和の初め頃、玩具研究者によって紙面子の祖型であると指摘され、泥面子と呼ばれるようになりました。泥面子は文献や出土品などから江戸時代中期頃には作られ始めていたと考えられます。江戸時代後期が最盛期で、明治時代になると徐々に数を減らし、鉛面子、紙面子へと流行が変化していきました。

分類 泥面子は考古学的には、

次の3つに分類されています。①円盤状の「ひのみこ面打」。②人面や人形をかたどった「ひのみこ芥子面」。③面打や芥子面を作るための土型である「ひのみこ面模」です(図1)。

面打は、円形がほとんどですが、六角形や花卉形のものもあります。また、大きさから直径2cm未満の小型、直径2cm以上3cm未満の中型、直径3cm以上の大型に細分することができます。

芥子面は、面打よりも出現時期が遅く、江戸時代後期と考えられています。元々は指人形として使用されていたようです。東京都台

東区の谷中三崎町遺跡では女兒の墓から京都産の芥子面が多量に出土しました。裏面に女兒の名前と思われる「つね」「常」と墨書されており、女兒がとても大事にしていたことがうかがえます。

面模は、はじめに土製か木製の原型を作り、それに柔らかい粘土を押し付けて土型を作って素焼きしたものです。多量の面模が出土した遺跡として東京都墨田区の江東橋二丁目遺跡があります。この遺跡は江戸時代後期の旗本屋敷跡と考えられ、敷地内には土製品や泥面子の製作工房があったと考えられています。泥面子の製作を副業とした旗本もいたようです。

ところが、京都市内における面模の出土例は面打に比べると多くはありません。今回の調査地周辺では面模の出土が集中しており、泥面子の他にも多量の土製品や性

格不明の小窯が発見されています。調査地にも製作工房があったのかもしれない。

図柄 泥面子に描かれた図柄には、文字・人物・動物・植物・信仰・縁起物・妖怪・家紋・幾何学文などがあり、その数は二千種類以上にもなるといわれています。泥面子が大流行した理由として、勝負事だけでなく、この図柄の豊富さから収集欲をかき立てたからではないでしょうか。また、江戸の遺跡でよく出土している力士・歌舞伎役者・役者の家紋・火消しの轟などの図柄の泥面子は京都では見受けられません。おそらく地域によって流行っている図柄に違いがあると考えられます。

遊び方 泥面子の基本的な遊び方は地面に穴をあけたり、線や図を描き、そこに泥面子を投げ入れて泥面子を取り合います。紙面子



図2 意銭『和漢三才図会』をトレース
国立国会図書館デジタルコレクションより

にある、面子どうしをぶつける遊び方はありません。泥面子の遊び方の起源は、平安時代の貴族の間で流行した「意銭」にあると考えられています。意銭とは平安時代の賭け事の一つであり、地面に穴を掘り、穴にめがけて銅銭を投げ、穴に入れば自分のものとして銅銭をもらえます(図2)。

この大人の賭け事が子ども達の間にも広まり、銅銭の代わりに泥面子、特に銅銭を模した面打が使用されるようになったと考えられています。泥面子の中でも面打の出土が一番多いのはそのためと考えられます。また泥面子を使用した賭け事は「キズ」と呼ばれ、大人も子どもも年齢に関係なく流行していたようです。特にキズが大流行していた江戸時代後期の江戸の町では、子どもの風紀の乱れを懸念して泥面子の販売と使用を禁止するなどの御触書が出されています。遊びに夢中になりすぎて取り上げられていたかもしれません。

おわりに 京都における泥面子の研究はまだまだこれからです。今後の新たな泥面子の出土や発見にご期待ください。

(岡田麻衣子)



図1 泥面子の分類